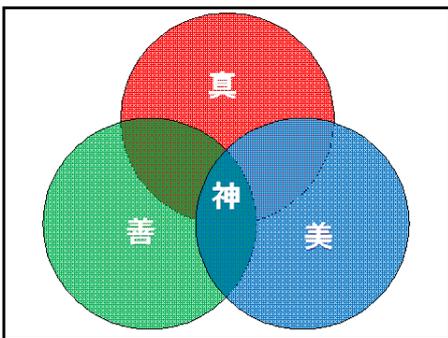


明治改暦と「金神」 — 金光大神における神との関わりをめぐる —

白石淳平（教学研究所）

はじめに

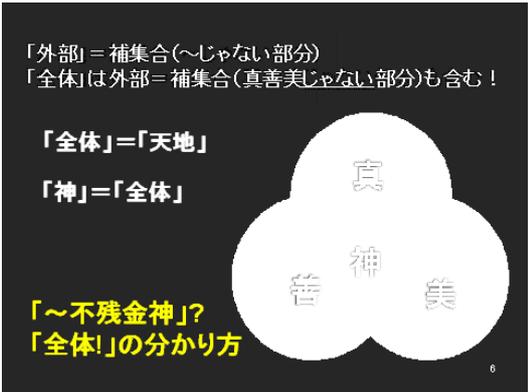
ご大祭前日の空気に包まれると、甦る苦い記憶があります。当時は27歳くらい、私が学院生の時の、初めての教話の不甲斐なさを思い出します。神様についてどうやって話題にできるのか、モヤモヤとしていた私は、調饌の御用の経験を通じて、例えば「美しい！」という「美」への感度が、神を感じ表わす一つの手がかりになってもいいのではないかと。そんなお話をしたわけです。でも、その説明の仕方があまり良くなかったんですね。



数学の集合論って、たぶん一度は習ったと思うんですが、ベン図って、皆さんご存知でしょうか。二つ以上の円を重ねて、物事の関係の説明に使われる図です。よく知られたたとえにもあるように、真・善・美という要素が重なり合うところ、それを神と捉えるなら、神へと至る入口は人それぞれ、色々あっていいのではないかと。

和集合とか、補集合とかで説明したわけです。案の定、何言ってるかわかんないって感じで、ポカ～ンでした。でもショックだったのは、もっと一番伝えたかった思いに表現を与えられなかったことなんです。

実は、本当に伝えたかったのはその説明の先にある内容だったんですね。言葉や数式など、眼に見える形で括って説明できるのは、あくまで人間の分かる範囲のことです。そのような人智の外部、つまり「剰余」として広がる全体の果てしなさの方を、指し示してみたかったわけです。例えば、真善美というそれぞれのカテゴリーの三つの円、つまり和集合の、その「外側」としての補集合の存在を、どのようにして意識するのかってことです。逆説的ですが、このように言葉を尽くして、かろうじて「神」なるものを表現しようとするからこそ、果てしない「全体」の広がり浮かぶ。そんな人間の営みの可能性もあるのではないかと、ということです。



ここでの「全体」はつまり、本教で言うところの「天地」に置き換えてもいいかもしれませんし、例えば神様との出会いって、そういう果てしなさとの出会いとしてもあるんじゃないでしょうか。そして、そうした「世界への認識」に関わる問題として神との関わりを考えてみたとき、例えば「覚帳」の表紙や「年譜帳」の冒頭に示された「二上

八小八百八金神不殘金神」なんていうのは、それこそ「外部」や「全体」への分かり方の問題に接しているような気がしてこないでしょうか。論文がでた昨年私は、厄年、つまり数え年で「大患」の42歳となりました。それもあってかもしれませんが、「分からない」という分かり方というか、開け方が、今、改めて大事な気がしています。その意味でも、「金神」が手がかりを与えてくれるように思うわけです。

民俗や文芸に見る神仏信仰とその表象

ところで、そうした着想にも関連して、日常／非日常といった境界を跨ぐイメージや言葉の積み重ねの上に成り立つ神様への想像力について考えてみると、その源泉が、時に困難な現実を生きていかねばならない人間における、神仏との関わり方の模索に生じた営みであること、そしてその営みは、様々な祭礼や神事の縁起譚としての神話、すなわち神語りに端を発しつつ、色んな文芸にも展開したことが浮かんできます。

例えば、「方除け^{かたよけ}」、「厄除^{やくよけ}」の信仰が篤かった福岡県のある神社は、古くは、大陸と行き来する人びとの航海の無事や事業の成功を願って創建されたそうですが、現在は参拝者によってこのような絵馬が奉納されています。皆さんご存じの『鬼滅の刃』ですね。我が家も例に漏れず、子どもたちにせがまれて書店に走りました。

さて、「鬼滅」がどう関係するのかというと、その神社、「宝満宮竈門神社」というんだそうです。主人公である「竈門炭治郎」との関連性を想像させる、「竈門」をその名に冠する神社なわけですね。九州一円を統治する大宰府政庁が置かれた時に、その「鬼門」にあたる「竈門山」で、国家鎮守のための祭祀が仕えられるようになったという由緒・縁起も、現代における鬼退治の聖地として結びつけられたのかもしれませんが。因みに、その「竈門山」は、修験の霊山としても有名で、このような市松模様の装束を身に着けているんですが、「鬼滅の刃」の竈門炭治郎の羽織との関連性を、どうしても妄想しちゃう模様なんですね。

さらに蛇足ですが、「土公神」、つまり竈門の神様は、マイナーな、謂わば家の「裏」側にひっそりと祀られた、私的な神様です。そうした、「土公神」のようなマイナーな神様は、不浄を嫌い崇りを恐れられるという〈否定性〉を伴う一方で、日常生活の万般に亘り、人々の死生に関わる幸福をもたらす〈肯定的〉な面も併せ持つという、つまり「両義的」な神性を有している場合が多いとされます。この、「両義性」という要素が、日常と非日常、この現実世界と異界とを媒介する上で重要になるわけですが、煮炊きの場である竈門の場合、「火」と「水」という両義性が重ね合わさられているわけですね。炭治郎は「水の呼吸」と「ヒノカミ神楽」という相反するような属性の技を両方使えるようになりますが、ここにも、竈門神の「両義性」が反映されているのではないかと、そんな妄想さえ膨らんでいきます。

以前、別の論文で触れたこともあります（紀要『金光教学』第56号）、我々が普段何気なく接している様々な物語の背景には、神仏との関わりの長～い歴史が湛えられていること、またそれは逆に言えば、そこでの神仏イメージ、信仰観、世界観といった表現や表象には、その都度の時代社会状況、人間状況が、何らか反映されているに違いないということも浮かんできます。

本教における「教祖」探究／「神」把握のあゆみから

しかし、その一方で、そうした物語の、呼吸じゃないですけど「型」、あるいは眼に見える「形」、例えば神様の性格や名前などに注目しすぎるような関心のあり方というものが、神様や世界への感じ方、分かり方を、なんだか逆に窮屈にしているという現状も、今、浮かんでいるように思います。

そこで、これまで本教において神様をどのように求め語ってきたのか、ざっと振り返ってみると、旧御伝記の時代、つまり昭和30年代以前には既に、「金神から天地金乃神へ」という、今も教内一般において理解されているような解釈が登場してきます。「覚書」の読解に基づくその解釈では、金光大神の信心が段々に進み、生神金光大神へと神号が変わっていくのに対応して、神様も、金神から天地金乃神へと変わっていく、あるいは、天地金乃神としての神性が顕れてくるというように言われてきました。いわゆる「神性転化」とか「神性開示」などですね。またこうした把握では、例えば「迷信打破」というキャッチフレーズに特徴的なように、金光大神の信心は、旧来の習俗よりも開明的で、因習への囚われから解放するものだという、「近代化」の歴史過程が、同時に重ね見られてきました。

でもなんだか、そのように綺麗に整理できてしまう説明の感じが私は苦手です、もっと言えば、そうした思考は、今や世界的にその限界が指摘されている、資本主義社会の「成長信仰」に、どうも重なって見えてきてしまうわけです。

そんな私にとって、「信心」って、もっとこう、前に進めず立ちつくしたり、思いが一つに定まらないような、そんな時にこそ求められるものではないか、と思うんですね。あるいは、衰えたり、弱くなったり、そういう人間の現実をまるごと抱え込んで、それでも余りある大きさや暖かさのあるものであって欲しい。そういう「信心」の世界が、「教祖」への「問い」として見出されていくとき、「教祖」や「神」を求めるこちら側、私達の視界は、どう開かれ、変わっていくんだろうか。私としては、そのところの方が、自分にとってより大切な問題関心となっているわけです。

このような関心は、例えば、『新世紀エヴァンゲリオン』や「天使本」が流行っていた私の学生時代、いわゆる世紀末の不安の中、近世以来の脱呪術化＝近代化過程に、純粋な意識、つまり神様に直で繋がっちゃうような天使主義への憧れが重ねられ、危

惧されていた時代状況にもリンクしているんだと思います。実感の欠如、尽きることのない自己承認欲求といった、今の世の中にも通じる社会状況を思い起こす時、改めて問われてくるのが、ともすれば「金神から天地金乃神へ」といった分かり方も、普遍へと一足飛びに繋がろうとする、個人的な問題に収斂される神と人との関わりとなっていないだろうか、ということなわけです。今としてこのことは、コロナや戦争など、人間の生の基盤や指針の揺らぎにより、もはや何が真実かその手触りさえ掴めないような現代社会に、投げかけるものがあるのではないのでしょうか。

そして、金光大神の生きた時代もまた、そうした意味での、神と人との関わり危機に、直面していたんじゃないか。この度の論文では、そうした問題意識も相俟って、改めて「金神」を取り上げなおしてみた、ということになります。

明治改暦と「金神」

そうした点にも関わって、天皇の崩御を伴わない200年ぶりの改元を経験して改めて想起されていたのが、幕末から明治へという移行期にあって金光大神が向き合っていた世の中は、何らかの社会的構えが調う間もなく制度変革に直面させられ、大きく揺れ動いていた、という事実です。

天保暦明治5年旧暦12月3日をグレゴリオ暦明治6年新暦1月1日とした明治改暦の影響は、約1か月分の日付が飛ばされる不都合だけではありませんでした。それまでは当然のように「暦」に併記されていた、日柄方角の善悪吉凶を解説した暦注や、年中行事としての節供なども、同時に廃止されたんですね。そうした変革によって、当時の人びとの日常生活は大きく揺さぶられることとなりました。

さて、その改暦が実施された明治6年以降に書き始められたと思われる「暦注略年譜」には、年号や十干、金光大神含め家族たちの生年月日、子供たちの名前の変遷や病気、そして、暦注における禁忌や金神など暦神に関わる内容、さらには、文化11年の出生から明治6年までの金光大神の歩みを略記した年譜が記されています。つまり、混迷する明治期の世相に金光大神が向き合っていた様子を浮かばせる資料なわけですが、そこからはさらに、次のような事柄にも関心が及んでいきます。すなわち、改暦当時の金光大神において、神との関わりを伴った世界への認識を揺るがされることは、自身や家族のこれまでの歩みが振り返られねばならない切実さと密接に関係していたのではないかと。またその振り返りに関する、神との関わりを問い直しは、決して、金光大神という一人格の内面に収まるような、定点を凝視するような視界ではなくて、人びとや世界との関わりを含め、その視界自体が解かれ、開かれていくような、神との新たな出会いであったのではないかと。

このことに関わって取り上げたいのが、「覚書」「覚帳」に加えて金光大神の生涯の

記録がうかがえ、特に時代社会の状況の推移を色濃く感じさせる「年譜帳」、またその前段階のメモ類と思しき、「手控え綴」という帳面です。これら帳面における明治6年の記事を相互に対照してみると、「暦注略年譜」の記事を基点にしつつ、「手控え綴」から「年譜帳」へ向かって段階的に記述内容が増加していく過程が予測されるのですが、その予測に立つ限りで、最終的に加わったものと見られるのが、「年譜帳」での「金神無し」との記述なわけです。このように、金光大神において繰り返し改暦という出来事の把握が試みられていく過程において、「金神無し」との記述がなされているのは、逆説的ですが、「金神」という神がその視界上にクローズアップされていく様相を浮かばせていると言えそうです。そうとすれば、従来言われてきた「金神から天地金乃神へ」という時系列に逆行する「金神」の顕れとさえ見えてきます。つまり、改暦による暦注の廃止によって「金神」の实在性が否定され、揺るがされる事態が、金光大神においては、かえって「金神」の再把握を促される迫りとして受け止められていた可能性です。

そして、忘れてはならないのは、「暦注略年譜」を基点に複数の帳面相互の連関を通じて「金神」が再把握されていくその前景には、改暦をはじめとする維新の変革によって揺るがされる人間の生の現実があったということです。教典には「金神」をめぐる伝承が数多くありますが、そのほとんどが、明治期、特に改暦以降に金光大神の広前に訪れた者たちが伝えた理解です。それほどに、当時の人々は時代社会の不安の中を生きていたということです。

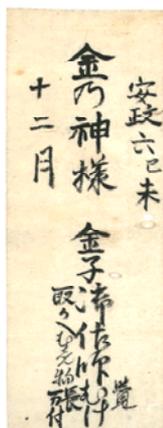
そしてだからこそ、帳面上に表されることとなった「金神無し」は、かつて「あった」、あるいは「ある」ことの可能性を人間の認識上の問題に収めて経験されるに留まるような、「ある／なし」で処理されるような神把握と同一地平上の事態ではないはずだ、ということになります。そこではむしろ、「金神無し」と記すことを可能にするほどに、自身の生の歩みに深く根差しつつも、同時に軽やかで、そしてある意味したたかな、「金神」との関わりそれ自体の創造的な展開が意識されることとなっていたのではないか、そんなふうに考えてみたいわけです。

諸帳面に浮かぶ金光大神の神把握の営み

論文では、金光大神における、そうした「金神」との関わりの模索を、諸資料の様相にうかがってみました。

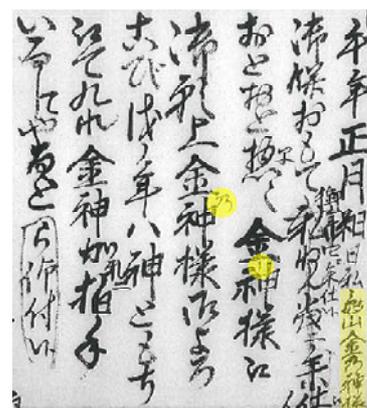
まず、『事蹟資料』所収の金光大神直筆帳面類とともに提供された、広前に関わる金銭のやりとりが記された帳面のうちの一つ、「金乃神様金子御さしむけ覚帳」の表紙を見てみます。中央上部に、大きく「金乃神様」と見えます。「安政六己未」「十二月」との年月が同帳本文冒頭の記事に対応するものであることから、同年を内容の起

点として調べられた表紙であろうことが推察されます。また、主に同年から慶応四年



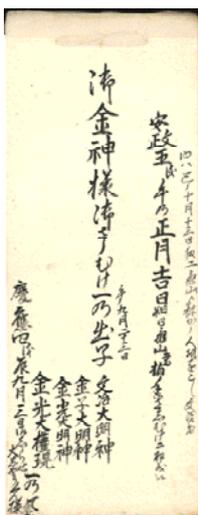
(つまり明治元年)までの記事となっており、明治初期あたりに整理された可能性が考えられます。表紙中央に大きく記された「金乃神様」には、安政六年末から明治初期に至る営みを、神との関わりから押さえ直そうとする金光大神の意識が読み取られます。その意味で、同帳表紙に示されることとなった様相は、神の名称や属性というよりも、金光大神における神との関わり方の模索、その営みのありようの方を浮かばせていると考えられるわけです。

因みに、ここに登場している「金乃神」は、「覚帳」安政五年正月の記事が各帳面を通じての初出なのですが、「覚帳」原文の表記を見ると、最初の「亀山金乃神様」の部分は後で書かれたものと思われる。さらに、続く「弟早々金乃[ノ]神様へお願いあげ、金乃神様お喜び」についても、「ノ(乃)」の字は、明らかに後から追記されたようにも見え、元々は「金神」との表記であった可能性が非常に高いわけです。



このことから、さっきの「金子覚帳」と起筆時期が近いとみられる「覚帳」の様相としては、少なくとも慶応年間までは「金神」と記され、それが何らかの理由で後から便宜的に修正を加えられた可能性があります。こうした点にも、明治以降における神との関わり方の揺らぎや変化の相が示唆されるわけです。

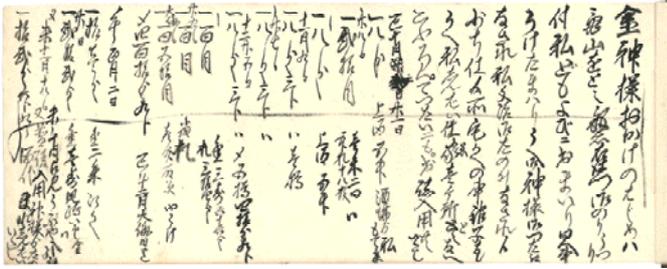
さて、このような「覚帳」の様相からすると、「金子覚帳」の表紙は「覚帳」の起筆以降に作成された可能性も浮上するのですが、このことに関わって、同時期に作成された可能性が高い「御金神様おさしむけ金銭^{ていり}出入帳」も見ておきます。



「金子覚帳」と共通する内容も見られる同帳の表紙中央には、「御金神様」との神名が示されています。この帳面は、神の祭祀をめぐる対外的な支出記録及び金銭初穂の年次別集計からなっていて、表紙左端に示された慶応四年九月三日のお知らせを契機として起筆されたと推察されます。なお、同日（三日）が、十二支の配当によって特定の方角を遊行する方位神八将神の一つで、「金神」との関わりが深いとされる「大しようぐん（大將軍）」の縁日であることが補足的に記されているのも興味深い点です。

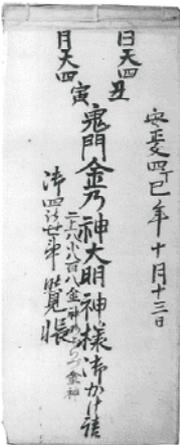
表紙全体としては、「御金神様おさしむけ」との記述の下に神からの神号授与を順を追って確認するような紙面となっています。注目したいのは、そうした神との関わり方の起点へ遡るようにして、いわゆる安政四年の「神の頼みはじめ」についての記述が付されている点です。

なお、次の一丁表の冒頭には、「金神様おかげのはじめは[….]」との、事の起こり



を振り返る文章に続けられるかたちで、弟の援助などに要した具体的な支出内容が書き出されています。人間の意識を乗っ取って弟繁右衛門に憑依した金神の出現に立ち会わされた金光大神にとって、

この出来事は、弟への援助という単なる人間的事情を超えた意味を、後の神勤行為に繋がる神との関わりの起点として確かめさせ、帳面への書き出しを迫るものだったと考えられるでしょう。そのようにして、「御金神様」との関わりのありようが、帳面上に反映されることとなっているわけです。



さて、ご存じのように、「覚書」には表紙に相当すると思しき記事は認められないのですが、「覚帳」表紙については、正確な作成時期は分かりかねるものの、慶應末から明治元年頃と見られる本文の起筆時期からすれば、金銭に関わる先の両帳面とおそらく同時期か、あるいはそれ以前に作成されたものと推察されます。

中央に大きく示された「鬼門金乃神大明神様」との神名が目目を引くその表紙には、上部に「日天四丑 月天四寅」と冠されており、また左部に小さく「二上八小八百八金神のこらず金神」と付されています。余白も含めた表記の配置をも意識しつつ形成されていったであろうこのような「覚帳」の表紙は、明治初期の金光大神における神との関わりの模索が、その営みの息づかいを伴って紙面に反映されていく様子を想像させるものとなっているわけです。

以上、「覚帳」での「金神」から「金乃（ノ）神」への表記上の変化・修正にも象徴的にかがえるように、神の名称や属性の再把握というよりは、逆にそうした認識的呪縛からの解かれとして可能となった、「金神」との関わりのしなやかな跳躍が、「金神無し」との記述には込められているように思われるわけです。

このように、改暦への直面は金光大神にとって、人間の認知をも拒むようなかたちで到来する眼前の苦難の由来を「金神」に求め、その難儀から助かりたいと広前へ訪

一、鴨方邏卒御役人、今日回りに、こちらには来るのじゃないけれども、この間、私、出張いたし、当家神様、発達でござるのうと申され。あなたはどちらでござりまする、私は岡山、わしは神信心いたするから参りました。拜んでもうてもよし、わざわざがわかりますか。私方には、わざわざはわかりませんと申し。しかし、**金神様は人を叱りだけの神でござるか**。私方に普請仕り、その後、病人あり。祈禱いたし、金神叱り、建物取らねば治らんと申し。この方には取らいでも一心に断り、御願ひ申し上げれば楽、と申し上げ。神様の事、話でき。今度は、皇国一般になり。神も立ち、氏子立ち、神の守も立ち、互いに喜ぶようになりと申され。話だけで御引き取りに相成り候。後で病人の御願ひ申し上げおき。一月二十二日、十二月九日。

(「年譜帳」八六丁表～裏、改行省略)

れる人びとの姿を、改めて自分自身の歩みと重ね合わせつつ見つめさせることになったと考えられるのですが、「年譜帳」には、そのことをうかがわせる象徴的な記述があります。

明治六年の改暦に伴う暦注の廃止から四年の月日が経過していた明治十年の冬の事です。一人の「邏卒」が、金光大神の広前に訪れました。引用の

記述は、その出来事を金光大神と「邏卒」との問答を交えて物語る内容となっているわけです。この「邏卒」は、取り締まりの職務として以前にも大谷に立ち寄ったことがあるのでしょうか。広前に多くの人びとが参集する様子を、予てから見知っていた様子です。職務上は厳しい管理のまなざしを民衆に向けている彼自身も何らかの信仰にあずかっており、自らの意思で広前に詣でたことを告げつつ、普請による「わざわい」への不安が吐露されています。その不安とは、具体的には、「金神無礼」による罪障を祈祷者によって指摘されたことから来るものと考えられます。そうとして、旧来の信仰習俗自体を取り締まる「邏卒」の口より発せられた「金神様」との神名は却って、その官憲の側の彼が一方で、家族とともに具体的な生活現実を生きる、一人の人間であったという厳然たる事実を際立たせることとなっているのではないのでしょうか。

その意味でこの記事は、普請など実際生活上の指針として遵守されてきた暦注の廃止が、改暦から数年を経てもなお人びとの日常に尾を引いていたその不安を、色濃く浮かばせるものと言えるでしょう。

「金神お廃し」として官憲による取り締まりが厳しさを増していた当時の様子については、これまでの研究によっても指摘されてきました。そうした従来の解釈において官憲は、信心に対する世間やお上、つまり新たな社会の変化やそれを推し進める明治政府の権力の象徴とされてきました。しかし重要なのは、この「年譜帳」の記事が、一人の生活者としての「邏卒」の顔をうかがわせている点です。当時あって、自身の現実状況打開の手がかりを求めて金光大神の広前に赴いた「邏卒」のそのような姿は、維新の変革状況に翻弄される生活現実の切迫さを、暦注廃止後もなお人びとに生きられていた「金神」の実相として浮かせているのではないかと、ということです。

引用では、そうした「邏卒」の訪れに対しての、金光大神の応答が続いています。「金神様は人を叱りだけの神でござるか」との、「金神」の属性をめぐる「邏卒」の問いかけは、一見、不在とされたことで一層深い部分で「金神」への恐れに呪縛されることとなっていた当時の人びとの不安を表徴するものと言えます。しかし、またその一方で、それだけではない可能性、すなわち名辞的意味への呪縛の「外部」や「剰余」の在り処を、金光大神の信心に求めようとする「邏卒」の期待が、そこには同時に表わされているのではないのでしょうか。それは、神の属性や名称ではなく、その関わり合いを見つめ続けてきた金光大神の、信仰世界像の全体性に相接していく心性の発露であった、と言えるかもしれません。

その意味で、「御願ひ申し上げれば楽」との、神との関わりの経験に根ざした、実践上の意味における金光大神の応答は、求められた問いに対応する回答の形式とはなっていないのですが、しかしそのズレこそが、「邏卒」にとって、「神も立ち、氏子立ち、神の守も立ち、互いに喜ぶようになり」と、自身の個的な問題状況を超えて、金光大神をも含む世界の助かりへ向けた開かれとしての意味を受け取らせることとなっ

